

蜀の歴史概略

一八四年

傭兵集団

蜀漢を建国した劉備は、黄巾の乱の際、関羽・張飛と共に兵を挙げた。二人と劉備との関係は、「寝る時には牀(寝台)を共にするほどで、兄弟のような恩愛をかけた」と伝えられる。三人は、君臣を超えた兄弟のような関係にあった。こうした関係は、趙雲と劉備の間にも見られ、諸葛亮を迎える以前の劉備の臣下団の特徴である。

この時期の劉備集団は、配下に名士が居つけないため、根拠地の支配が安定せず、傭兵として群雄の間を転々とした。かれらと名士との関係は、次の話から窺い得る。張飛はある日、劉巴のもとに泊まりにいった。ところが、劉巴は、張飛と話もしないので、張飛は怒って帰ってしまった。諸葛亮は劉巴に、「張飛は武人とはいえ、あなたを敬愛しています。少しは下の者にも配慮をして下さい」と言った。劉巴は、「われわれは、世の中の英雄と交際すべきであつて、どうして兵士(兵隊野郎)なんかと一緒に話すことができるものか」と答えたという。劉巴にとって、張飛は「兵士」に過ぎず、共に語るに足りる存在ではなかった。

劉備は、公孫瓚のように名士を受け入れない態度を示したわけではない。むしろ、名士を尊重していた。したがって、一時的ではあつたが豫州・徐州をえると、陳羣・陳登という当時を代表する名士を迎えている。しかし、かれらは劉備がそれらの州を失うと集団に留まり続けることはなかった。名士が、本籍地を捨ててまで随従する魅力や将来性が、劉備とその集団には欠けていたのである。また、劉備も陳羣の献策に従わなかった。関羽・張飛を差し置いてまで、名士の進言に従える集団でもなかった。こうして劉備集団に名士は留まり続けず、劉備は傭兵として群雄の間を渡り歩き、官渡の戦いで袁紹の味方をして敗れたのち、結局、荊州の劉表を頼ることになった。

劉表政権は、襄陽の名士蔡瑁や南陽の名士蒯越に支えられて安定しており、平和を求め多くの名士が荊州に集まっていた。後に劉備を支える諸葛亮も、徐州から荊州に移り住んでいた。諸葛亮は、蔡瑁のめいを妻としたほか、姉を龐徳公の子龐山民に嫁がせ、襄陽を代表する豪族の蔡氏・龐氏と婚姻関係を結んでいた。そして、司馬徽より「荊州学」を学び、龐徳公より「臥龍」と評され、「鳳雛」の龐統と、襄陽グループと呼ぶべき名士集団の中で高い評価を受けていた。

臥龍

二〇二年

髀肉の嘆

二〇七年

三顧の礼

水魚の交わり

二〇八年

長坂の戦い

呉と同盟

一方、劉備は焦っていた。長いこと馬に乗らなかつたため、股の内側に贅肉が付いたことを嘆く「髀肉の嘆」という言葉が生まれたのも、この時期である。しかし、客将という立場で、劉表の臣下を自己の部下にすることはできない。したがって、高い名声を持ちながらも、劉表では天下を統一できないと考へて距離を保っている襄陽グループの名士は、格好の接近対象であつた。また、襄陽グループ側も、劉備がこれまで掲げてきた、漢の一族として漢室を復興するという大義名分と、曹操も認める英雄としての資質に、興味を持った。こうした両者の思いが、劉備が諸葛亮を迎えるときに尽くした「三顧の礼」を巡る駆け引きとなつて展開されるのである。

劉備が諸葛亮を招聘するために尽くした三顧の礼は、皇帝が老儒者を迎える時の礼であり、無官の青年への礼としては重過ぎる。襄陽グループの徐庶が、諸葛亮、ひいては自分たち名士を劉備に高く売るために、三顧の礼を尽くさせたのである。名士諸葛亮は、君臣関係とは別の場で成立する「臥龍」という名声を存立基盤としていた。諸葛亮の権威を保つには、名声という目に見えない力への劉備の尊重を三顧の礼という形に現す必要があつたのである。三顧の礼により、自分の尊重を天下に、そして関羽と張飛に宣言させた諸葛亮は出仕する。そして、荊州・益州を領有し、孫呉と同盟して曹魏と戦う「草廬対」と呼ばれる基本方針を披露して、劉備集団の方向性を定めた。ここに劉備集団は、関羽・張飛を中心とする傭兵集団から名士諸葛亮を中心とする政權へと質的に転換し始めた。したがって関羽と張飛は、不満を募らせた。それに対して劉備は、「諸葛亮と私は水と魚の関係である」と弁明した。すなわち劉備は、水がなければ生きていけない魚のように、諸葛亮ら名士の支持がなければ、荊州で勢力を拡大できなかったのである。曹操が袁氏を滅ぼして南下し、劉表が病死すると、新野に駐屯していた劉備は、曹操に追われ江陵に逃れる。劉備を慕つて続々と民が合流し、当陽に至るまでには、十万余に膨れ上がった。劉備は、関羽に水軍を与えて江陵に向かわせ、諸葛亮を孫権へ使者として派遣した。曹操は騎兵を選びすくつて劉備を急追し、長坂坡で決戦となつた。曹操は、民を含む劉備軍をほしきままに殺戮した。趙雲が阿斗(後の劉禪)を守つたのは、このときである。また、しんがりを務めた張飛は、わずか二十騎を率いて長坂橋を切り落とし、川を背にして立ちほだかる。「わたしが張益徳である。やつてこい。死を賭けて戦おうぞ」と叫ぶと、曹操軍から近づくる者は、誰一人もなかったという。

張飛の活躍により、劉備が夏口に到着したころ、諸葛亮は孫権に同盟を持ちかけていた。それを助けたのは、目的

正史

魏

蜀

呉

後漢書

名場面四十

思想と文学

魏志倭人伝

資料

索引